

博士論文要旨

母子の心身の健康に影響を及ぼす要因に関する研究

堀部 めぐみ

産褥期は、出産によるホルモンの変化や母親役割遂行などの精神的なストレスの増加により女性のライフサイクルの中で最も精神障害が発症しやすい時期であり、産後うつ病を発症する母親の存在が社会問題として捉えられている。先行研究では、産後うつ病のリスク要因として、産後のホルモンレベルの低下などの身体的要因、ストレスなどの心理的要因、及び支援者の不在などによる社会的要因が報告されている。産後うつ病は夫婦関係や家族関係に影響を及ぼすだけでなく母親の自殺や子殺しにつながることもあり、産後うつ病に対する支援は周産期メンタルヘルスの重要課題である。

母子を取り巻く生活環境は急速に変化、多様化しており、子育てへの影響要因を検討するためには、従来報告されている要因だけでなく、近年の母子を取り巻く環境の変化を考慮することが必要であると考えられる。本研究では、母子の心身の健康に影響を及ぼす要因について検討することを目的とした。

1. 母マウスの母性行動と仔マウスの脳機能及びマウス母仔の網膜機能に対する青色 LED の影響

4 週間の日中の青色 LED (Light Emitting Diode) 曝露により、母マウスにおいて網膜の障害が引き起こされたが、母マウスの巣作り行動、仔の生存率、発育や出生仔の行動に変化はなかった。以上の結果より、サーカディアンリズムに影響しない実験条件では、青色 LED 曝露は母マウス及び仔マウスの脳機能にとって深刻なストレスにはならず、母性行動への影響はないことが示された。

2. 産後うつ病に影響を及ぼすホルモン避妊薬を含む薬剤

ホルモン避妊薬を含む薬剤と産後うつ病の関連性について、FDA(米国食品医薬品局: Food and Drug Administration) の有害事象自発報告データを検討した。レボノルゲストレル、エトノゲストレル、セルトラリン、ドロスピレノン、フルオキセチン、トピラマート及びクエチアピンのオッズ比の95%CIの下限値が1を上回った。この結果から、ホルモン避妊薬及び精神疾患治療薬が産後うつ病のリスク上昇と関連する可能性があることが示された。

3. 産後うつに関する母親たちのソーシャルメディアへの書き込みの内容

母親たちの産後うつに関するソーシャルメディアへの書き込みには20代や有職者によるものが多く、また、母親たちは自分の思いそのものよりも、自分が置かれた辛い状況を語る傾向にあることが示された。

4. 母親の育児ストレス及びコーピングの実態

産後1ヶ月の母親に対するアンケート調査から、育児ストレスの高さを示す得点は、初産婦に見られる育児の不慣れや核家族による支援者の不在、産前の就業、混合栄養、及び認知的評価におけるコントロール可能性が低い場合に高くなることが示された。

以上、サーカディアンリズムに影響しない青色LED曝露による母性行動への影響はないこと、また、産後うつ病の罹患にはホルモン避妊薬及び精神疾患治療薬などの薬剤や母親の年代及び職業などの背景が関連する可能性があることが明らかとなった。産後うつ病の罹患要因をもつ母親に対する、予防を含めた支援が期待される。

【略語】

LED: Light Emitting Diode

FDA: Food and Drug Administration

95% CI: 95% Confidence Interval

論文審査結果の要旨

氏名（本籍）	堀部 めぐみ (岐阜県)
学位の種類	博士（薬科学）
学位記番号	甲 第 1 7 号
学位授与年月日	平成 3 1 年 3 月 1 0 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学位論文の題名	母子の心身の健康に影響を及ぼす要因に関する研究
論文審査委員	(主査) 寺町 ひとみ
	(副査) 中村 光浩
	(副査) 永澤 秀子

本研究は、母子の心身の健康に影響を及ぼす要因及びその支援策について検討したものである。サーカディアンリズムに影響しない青色 Light Emitting Diode (LED) の曝露が妊娠から早期育児期のマウスの母仔に及ぼす影響を検討したところ、母性行動及び仔の脳機能の発達に影響を及ぼさないことを明らかにしたが、妊娠期及び授乳期における LED 使用の安全性に関してさらなる研究の必要性を提言した。また、大規模有害事象報告データベースの分析により、産後うつ病の罹患には、ホルモン避妊薬及び精神疾患治療薬が関連する可能性があることを明らかにした。さらに、母子の心身の健康に対する支援策として、母親らの産後うつに関するソーシャルメディアへの書き込みの内容についてテキストマイニングによる分析を行い、産後うつの予防には、夫を含めた育児支援者の調整、若い母親、非正規雇用者へのより手厚い支援が必要であることを明らかにした。また、産後の母親へのアンケート調査の結果を心理学的ストレスモデルに依拠し検討した結果、育児ストレスは、母親の背景及びストレスコーピングによる違いを考慮した支援を提供することで軽減する可能性があることを明らかにした。以上より、本論文は母子の心身の健康を向上するための一助となるものであることから、博士（薬科学）の論文として価値あるものと認める。